埼玉工大紀要
No. 5 (1987)

J. Harris と言語の自然性

——記号をめぐる思想 II——

広 瀬 友 久

序

18世紀イギリスの古典学者・哲学者であり，政治家としても活躍した James Harris (1709–1780) は，主著 "Hermes: or, A Philosophical Inquiry Concerning Language and Universal Grammer, 1751" (「ヘルメス，または言語と普遍文法に関する哲学的探求」，1751) に於て，英文法の基礎づけをおこなひつつ，彼独自の言語哲学を展開してゐるが，その概要は次のやうなものであった。

ハリスはまづ，言語を精神のエネルギーの表出とし，言語活動の究極的な諸力との関係に於て言語の分析を行ってゆく姿勢を示す。そして文を，さらには語（品詞）を，その表出してゐるエネルギーに応じて分類し，普遍的な性格付けを与へてゆく。普遍文法のこのやうな理念的性格は，例へば，知性の時間把握の形式（認識のエネルギー）が，動詞の時制の一般図式として表出されるといふことの解明に於て最も明瞭に現はれてゐるのである。

ハリスは言語の本質を，その質料を有節音，形相を意味として把握する。そして言語を，契約によって意味をもった有節音の体系とする。さらに模像との比較によって，語を恣意的な記号，それも事物のではなく一般観念の記号であるとし，その一般観念の形成を精神のエネルギー（知性の働き）によって説明してゆくわけである[1]。

ハリスは，もっぱら古典からの引用によって，自説の根拠付けをおこなってをり，同時代の思想家に対しては直接には全く言及してゐないが，次の二つの流れを背景に置くことができさうである。その一つは，ホッブズ，ロック以来のイギリス経験論の流れであり，そこに於ては，語が，事物の

記号である観念の恣意的な記号であるとされてゐる。もう一つは，ケムブリッジ・プラトニスト達からイギリス・ロマン派（特にコウルリッジ）への流れであり，そこに於ては，想像力や精神の創造的能動性が重視されてゐるのである。

このやうな背景を考慮に入れつつ，本稿では，言語の自然性をめぐる思考の枠組の中でのハリスを位置づけを試みてみたい。言語の意味作用の根拠を自然に求めるといふ発想は，人間が言語を考へ始めて以来存在するものと思はれるが，その様々な展開の中に，現代言語学のそれをも含めた言語考察の基本的諸装置が網羅的に見られるやうに思はれるからである。そしてそこには，自然観といふ人間の認識のもう一つの根本要因が密接にからんでくるわけである。さらに17・18世紀のイギリスに於ては，政治，法から宗教，道徳，文学，美学に至る様々な分野の思想の展開の中で，自然を讃へ，自然に根拠を置かうとする方向が顕著にでてきたやうに思はれる。それは，ハリスの背景をなすと考へられる前述の二つの流れにも深く関はってゐるやうに思はれるのである[2]。「ヘルメス」序文に於て，ハリスは，精神を，水が注がれる水槽のやうに知識に対して受身的なものであるとするやうな考へを否定して次のやうに言ってゐる。

> 著者はむしろ，知識の生長は果実の生長と似てゐると考へる。外的な要因がある程度は協力するとしても，樹木の内的な活力と資質こそが，その果汁を然るべき成熟へともたらすのである。

1. 自然言語論の系譜

言語の自然性に関する議論の古典的な例は，プラトンの「クラテュロス」に於て見られる[3]。それは，事物と名称の関係の適切性をめぐって展開してゐる。クラテュロスは，ものの名前は全く恣意的に決められたものであるとするヘルモゲネスに対し，名前とものの間には密接な自然的関係があり，それは名前がものの本質を表はしてゐることであると主張しようとする。両者の立場は，その根拠は正反対であるにせよ共に不適切な名称の存在を否定することになるが，ソクラテスは両者の間を弁証法的に往復して，最終的には，名称を離れた事物の本質の存在とその把握を最も重視し，名称がもたらす概念がむしろ事物の本質の認識を阻害する危険があることを指摘するに至るのである。いづれにせよクラテュロスの立場は，語

が事物を模倣的に再現してゐるといふことに，その意味作用の根拠と正当性を求めるものとなってゐるのであり，この立場を表現 (representation) の自然言語論と呼ぶことができよう。ここではどうしても，言語から独立した事物の世界の存在，言語に先だっての世界の分節化が前提されることとなる。模倣といふことは，それを何らかのもっと大きな，ともすれば神秘的な力の働きの結果としない限り，言語を事物に対して従属的な立場に置くことにもなるといへよう。そしてまたこの前提は，ヘルモゲネスやソクラテスのやうなクラテュロスの反対者の主張にも，共通して存在してゐて，ソクラテスの指摘がさうなってゐるやうに，むしろ彼らに有力な論拠を与へることにもなるのである。アリストテレスも，この共通の前提のもとに，'On Interpretation' に於て，名称が有意味であるのは自然によってではなく，約定によってであるとして，言語の自然性を否定してゐる。アリストテレスの場合は，語は，概念の恣意的記号なのであり，その概念と事物に自然的関係があるときにのみ，事物の記号たりうるといふかたちで，言語と事物が切り離されてゐるのである。

表現の自然言語論に対して，言語を人間の内的な本性 (nature) の表出とするやうな，表出 (expression) の自然言語論と呼ぶべきものが存在する。ルクレティウスは，「物の本質について」の第5章で，言葉の変化に富んだ音を人間に発しさせるのは自然の働きであり，口の利けない動物ですら自らの状態を鳴き声の微妙なニュアンスで表はすのであるから，人間が異なった感情に応じて様々な音声で事物を区別するのも当然である，としてゐる。この表出の自然言語論で前提となることは，人間の生得的 (innate) な本性の存在であり，それをどのレヴェルのものとして把握するかで言語観はさらに分れてくるといへよう。また表出に，形のないものに形を与へるといふ意味をもたせれば，この表出の自然言語論といふ呼び方は，分節化された世界の存在が言語に先だつものとして前提されてゐないやうな場合によりよくあてはまるといへる。ルクレティウスの場合も，音声を発する以前には人間の内部にも外界にも区別が生じてゐないといふ想定がなされてゐると考へられるのである。

この二つの自然言語論は，ユダヤ・キリスト教の伝統の中で，アダムの言語の思想として合流した形となる。ここに於てはまづ，アダムが，神の似姿として，本質認識のための理性能力を吹き込まれてゐることが前提となる。アダムの言語は，彼の本性であるこの内的能力の自然的な表出なの

であり，アダムがものに名前を与へると，それはそのものの本質を表現することになるわけなのである。この思想は，古代，中世，ルネサンスを通して様々な形で展開したが，そこには共通して，バベルの塔以来の言語の混乱と堕落への嘆きと，理想の言語を回復したいといふ願望が存在してゐたといへる。プロテスタンティズムの興隆は，聖書の真の意味の解明の要求と結びついてゐただけに，これに新たなインパクトを与へることとなった。またルネサンス期に流入，復活した新プラトン主義，ヘルメス主義，カバラ思想などの様々な神秘思想は，言語を力をもったものと考へ，その根拠を言語と事物の密接な関係に求めるところから，当然この伝統と結びつき，その豊かな土壌を形成することとなった。16～17世紀のドイツ神秘主義者ヤコブ・ベーメは，いかに音声の単位が事物の性質を模倣するかを説明してゐる[4]。そしてこの伝統は，17世紀の後半に，ヴァン・ヘルモント (Francis Mercury van Helmont, 1614～1698) の 'Alphabet of Nature' に於て，一つの極限的な形を示したといへる。ヘルモントは，ヘブライ語は神の創造の言語であり，その個々の語は事物の本質を正確に表現してゐると考へた。そして彼は，現在のヘブライ語を時の流れと無知によって堕落したものとし，自分はその原型を発見したと主張するわけである。この神の創造の言語といふ考へは，言語に神秘的な力をもたせるものであると同時に，神の本有 (innate) の観念に言葉が発せられて形が与へられるといふ主張に於て，表出の自然言語論の最も根本的な性格を示すものであるといへる。またそれは，事物の世界が言語を通して生み出されるといふその主張から，範型となる言語が事物の本質を表はすといふこととなり，結果として表現の自然言語論を包摂することにもなるわけである。そしてヘルモントは，ここで，17世紀にひろく見られた，事物や概念と本質的な関係を有する記号としての実在記号 (real character) の構想を取入れ，実在記号としての真に自然的なヘブライ語のアルファベットの原型を再現することで，神の創造の言語に到達できると考へたのであった[5]。

ベイコンは，彼の「市場のイドラ」に関する主張に見られるやうに，言語の介在は，様々な誤れる幻影を生むが故に，むしろ事物の認識の妨げになると考へてをり，彼はそこから支那文字にヒントを得て，概念や事物を直接指示する実在記号を構想した。17世紀に数多く現はれる普遍言語論，普遍記号論は，だいたいはこの発想の延長線上に展開するといへるのであ

り，新しい数学や実験哲学の隆盛を背景に，事物の明晰な認識を目指すが故に，混乱した自然言語（日常言語としてのそれ）には信を置かず，人工言語の構築へと向かふことになるのである。その最も精密なものはウィルキンズ (John Wilkins, 1614～1672) の図表であるが，このやうな，この時代の新しい学問の要求に答へるための人工言語の構想にも，宗教的動機が無かったわけではないのである。ウィルキンズ自身が聖職者であったこと，この時代が宗教的分裂と対立の時代であったことを考へても，このやうなかたちでの学問の組織化が結局は宗教的和解と統一をもたらすと考へられてゐたといふことが，十分推測されるのである。従って，同じベイコン派からアダムの言語を讃へる発想がでてきても不思議ではない[6]。ウェブスター (John Webster) は 'Academiarum examen' (1654) に於て，アダムが動物達に名前を与へたとき，彼は名前と本質の絶対的一致を理解してゐた，また自分の内部に本来備はった光でイヴの何たるかを知った，としてゐる。そして，動物ですら自然の言語で理解しあふことができるのに，人間のみが，魂の音と内部に刻印された観念との関係を見失って，その本有の観念に，それとは一致しないやうな勝手な音を付与することになった，としてゐるのである[7]。結局は，現在の言語の不完全性を意識したときに，理想の言語としての人工言語の構築を考へるか，あるいは本来の自然言語に戻ることを考へるかで，取る方向が異なってくるといってよいであらう。

自然言語論の根本的な否定は，同じくベイコンから出発したホッブズ，ロックの線で最も明確にでてきたといへよう。二人は共に語と事物の間に観念を置くが，語と観念の関係を，従って語と事物の関係を全く約定的で恣意的なものとする点で，まづ表現の自然言語論とは本質的にあひ容れない立場をとる。さらにロックは，語は観念の記号であるとしたうへで，その観念には全く生得的なものが存在しないこと，またそもそも精神には，その観念の形成に関しても何等の生得的な原理，原則が存在しないことを主張して，表出の自然言語論の成り立つ可能性をも排除してしまってゐるわけである。ロックは，ベイコンと同様，事物の認識に於ける言語の役割にも否定的である。語が表はしてゐる観念は，せいぜい事物の外観から抽象された不完全なものでしかなく，事物の真の本質を表はすものではない。それは，言語が成立したのが知識がはるかに未発達であった時代であることからもわかることであり，そのやうな言語に依存することは，知識

の発展にとって妨げにしかならない，とするわけである。この主張はまた，類や種の概念は，人間が創った名目的本質 (nominal essence) を表はすだけで，事物の真の内的構成である実在的本質 (real essence) を表はすものではない，とする彼の本質論と並行してゐる。そしてロックは，神秘主義者達にみられる言語の多義的な使用を悪用として退け，言語の象徴機能の拡大の方向にも歯止めをかけてゐるわけである。これらのロックの主張の背後には，ベイコンと同じく，事物の真の認識に近づかうとする動機があったことは確実であるが，精神がまづ白紙状態として存在することを敢へて強調したのは，内的原理によるよりはむしろ教育によって精神が発展してゆく可能性を考へてゐたためと思はれるのである[8]。

ロックは，観念それ自体に生得的なものは存在しないとしながらも，観念形成の能力に関しては生得的なものを認めてゐたとも考へられる。しかし，ホッブズ，ロックの反対者達にとっては，彼らは二人とも，精神を全く受動的で機械的あるいは惰性的なものと考へてゐたやうに受け取られたわけであった。ケムブリッジ・プラトニスト達は，精神の内的原理，内的活力を重視しようとする。ヘンリー・モア (Henry More, 1614～1687) は，'An Antidote against Atheism' に於てデカルト流の神の存在論的証明を試みてゐるが，そこでは，神の観念に到達するための内的原理の存在，つまり完全な存在に関する観念が生得的な形で精神に付与されてゐることを認めることが不可欠の前提条件とされてゐる[9]。ラルフ・カドワース (Ralph Cudworth, 1617～1688) は，'A Treatise Concerning Eternal and Immutable Morality' に於て，知識は精神が内部へ向かって働くエネルギーなのであり，外部から働く事物から生じるものではない，としてゐる。彼は，精神の持つ観念には，外界の可感的な対象物からではなく，精神それ自体の，内部へ向かふ活動から生じるものが存在する，とする。そして，人工物に関する観念は，すべてその内部に，感覚からは決して生じないものを含むが，そのことは，植物や動物などの自然物の観念についてもいへる，とするのである。つまりカドワースは，自然界に於ける知性の働きを考へてゐるのであり，この世界そのものを知的存在であるとして，さうであればこそ精神の内部へ向かふ活動（知性）によって世界理解が可能になると考へてゐるわけである。彼のこの構想は，'The True Intellectual System of the Universe' に於て展開されてゐるが，その中で彼は形成的自然 (plastic nature) といふ考へを打ち出してゐる。それに

よれば，自然は，神の永遠の知性による配剤を，質料の世界に於て代行するものとなるわけである。

ロックの弟子でありながら，ケムブリッジ・プラトニスト達から深い影響を受けたシャフツベリー (Third Earl of Shaftesbury, 1671～1713) は，真善美の調和的一致を夢想したが，その根拠を自然に置いた。彼はカドワースから形成的自然の理念を受け継ぎ，主著 'Characteristics of Men, Manners, Opinions, Times' に於て，真の詩人を第二の創造者と呼び，その活動をそれに喩へてゐる。また，おなじ著書の中で自然のエネルギーについて触れ，個々のものの中の自然は，外部から妨害されないかぎり，常に確実に自らにとって善であるところのものを生み出してゐる，としてゐる。従って，病人の中の自然は病気を追い出すまで戦ひ続けるのであり，また私達の周りにある植物に於てすら，自然は完全を目指して働き続けてゐるわけなのである[10]。また，オクスフォードの学生への手紙の中で，ロックが生得観念を否定してゐることに触れて，問題は，人間がある観念をもって生まれてきたかどうかではなく，経験に由来しない観念を生み出す内的機構を備へてゐるかどうかなのだ，としてゐる。これは，観念そのものよりも，その内的エネルギーを精神にとってより本質的なものとする点で，カドワースの考へをさらに押し進めたものといへよう[11]。

2. ハリスと言語の自然性

これまで述べたやうな自然言語論，自然論の流れの中に置いてみると，「ヘルメス」の言語哲学の性格はどのやうなものとして見えてくるであらうか。

まづ表現の自然言語論に対する関係をみてみよう。ハリスは「ヘルメス」第三部に於て，言語の本質を，その質料を有節音，形相を意味として把握し，言語を意味をもった有節音の体系としてゐる。その際，言語と動物の鳴き声との比較をおこなひ，両者は意味をもつといふ点で共通であるが，その意味の由来は，動物の鳴き声の場合は自然であるのに対し，言語の場合は契約であるとして，言語を約定的なものとみなす立場をはっきりと打ち出してゐる。さらに，この世界と言語体系，世界の中の個物と個々の語が，オリジナルと模像の関係にあるかどうかを検討して，この世界の事物の大半が有節音をその自然的属性としてもってゐないことから，語は

事物にとっては全く恣意的な随伴物即ち記号であるとし，言語がこの世界を模倣的に再現するといふ可能性を退けるわけである。そして，人間の思考の伝達に於て，自然的な直観によってすぐにわかる模像よりも，習慣や制度によってのみ理解できる記号が選好される理由として，記号は，模像のように事物の自然的属性に制約されないが故に，その形成が速やかで容易であり，しかも模倣不可能な対象の代行も可能であるといふ点を挙げている。かくして，事物の実在的本質や属性を模放的に表現した言語は，かつて存在したこともないし，そのやうな言語を形成することも不可能であるとされるのであり，ハリスの立場は，表現の自然言語論とは全くあひ容れないものになってゐるといへよう。

以上の点に限定すれば，ハリスの主張は，アリストテレスは勿論のこと，彼が非難し続けてゐる経験論者達のそれとも，それほど隔たってゐるわけではない。しかし，ハリスの場合，表現の自然言語論の否定となる主張，つまり言語は恣意的な記号の体系であり，約定的なものであるとする主張それ自体が，彼の表出の自然言語論の構想の中に包摂されたかたちになってゐると考へられるのである。ハリスによる言語の根本規定は，言語を，人間の最良にして最も高貴なる能力である理性と社会性の結合エネルギーとするものであった。そして彼は，人間はその本性によって (by nature) 理性的で社会的な存在である，としてゐるのである。従って，言語が約定的なものであることは，人間の本性である社会性の現はれにほかならないといへるわけであり，また言語が恣意的な記号であるといふことも，その伝達交流の媒体としての機能的優位といふことから，同様の意味で考へることができるわけなのである。

では，人間のもう一つの本性である理性は，言語とどのやうに関はるのであらうか。ハリスは，語を記号としたうへで，それが何の記号であるかを問題にする。そして，語を感覚に与へられる外界の個物の記号とした場合の様々な矛盾を指摘し，語は，人間の内部にあるもの，つまり観念，それも一般観念の記号である，とするわけである。外界の個物は，この一般観念の記号である語に限定詞を付与することによって個別特殊観念を形成し，それを通して指示することになるのであり，かくして，言語と，個物の集合として考へられてゐる事物の世界との間に，観念が置かれることになったのである。そして理性は，語がその記号となってゐる一般観念の形成に関はることとなる。

経験論の場合と同様，ハリスも，認識の出発点に感覚を置く。しかし感覚は対象の直接の存在を離れて持続することができないので，事物の形相を保持するためには想像力といふより上級の能力が働かなくてはならないのである。そして，想像力が感覚の流動をとどめたところに，理性と知性が働いて一般観念を形成することになるわけである[12]。ハリスによれば，この理性と知性の働きこそ，精神の本性から自然発生するエネルギーによるものなのであり，このやうにして形成された一般観念に語が結び付くことで，この面でも，言語が人間の内的本性の表出であることが明らかになるわけなのである。

さて，一方ここで，ハリスが，人間の精神が観念そのものを生得的な形でもってゐると考へてゐたわけではないことも明らかになったといへよう。彼が生得的と考へてゐたといへるのは，精神の本性である理性の働き，つまり観念形成の能力であり，この点で彼はシャフツベリーの影響下にあるわけである。しかしさうであるとしても，彼も感覚を出発点とし，語を観念の記号とする以上，自己の立場を経験論から本質的に区別するのがむづかしくなるといへよう。そこでハリスは，観念の根源的な由来を問題にする。そして，ここで，明らかにカドワース，シャフツベリーから受け継いだと思はれる自然観を展開するのである。つまり，自然の精妙さを考へれば，それを設計されたものと想定せざるをえないとし，設計者たる精神（神；Deity）を立てるわけである。一般観念即ち知的観念は，神の本有的観念として，神に帰せられることになる。神は，自らの内なる知的形相を範型として，この世界を自らの姿として観てゐるのであり，であればこそ人間の知性は，この世界から知的形相を取り出し，一般観念を形成することが可能となるわけなのである。かくして，ハリスにとっては，知性がその本性に従って働くかぎり，語が結び付く一般観念は，事物の本質と一致することになるのであり，ロックが両者の不一致を考えたが故に，言語に対して否定的となったのとは，全く反対の姿勢を取ることとなったのであった。無論，様々な要因によって知性の自然な働きが妨げられることがあり，そのために現実に存在する言語には，色々なレヴェルのものがあることは，ハリスも認めてゐる。しかし，とにかくハリスには，知性の完全な働きによって産み出された最高最善の観念を原型とする理想の言語としてのギリシャ語が存在してゐたのであり，それをモデルとしたが故に，独自の表出の自然言語論を展開させることができたのであった。

結　　語

表現の自然言語論と，表出の自然言語論といふ二つの概念装置によって，自然言語論の歴史的展開をたどり，ハリスの言語哲学の性格を明らかにしようとしてきた結果，それが独得の表出の自然言語論であることが見えてきたやうに思はれる。それは言語の基礎付けであると同時に，ある種の理想の言語の提示となってゐるがゆえに，アダムの言語と似てゐるともいへる。しかし，神が立てられてゐても，そこにはアダムの言語に見られる神秘性はない。それは，神秘性が忍び込む場所である語と事物の間に，理性と社会性が置かれたことが理由であるといってよい。その両者が共に，言語活動に関はる精神のエネルギー，表出さるべき内的本性とされたのであった。

今後，「ヘルメス」から新たな意味を読みとってゆくためには，表出概念をさらに深めてゆく必要があるであらう[13]。そしてそれには，同時代のドイツに於ける言語哲学の展開を押さへたうへで[14]，コウルリッジの言語思想を検討してゆくことが，様々なヒントを与へてくれると思はれるのである。

注

1) 「ヘルメス」の言語哲学に関しては，拙論「J. Harris の言語哲学」(「'Contexture' 埼玉工大教養紀要，1986」所収）に於て，その概説を行なった。
2) 18世紀イギリス思想をその自然観の展開を中心に置いて概観したものとしては，Basil Willey 'The Eighteenth-Century Background: studies on the idea of nature in the thought of the period', 1940 がある。
3) ギリシャ，ローマの古典文献はすべて，Loeb Classical Library の対訳を参照した。
4) ルネサンス期の神秘思想の中で，言語がどのやうに扱はれてゐたかについては，Brian Vickers 'Analogy versus Identity: the rejection of occult symbolism, 1580～1680', 1984に詳しい。この論文は，'Occult and scientific mentalities in the Renaissance' ed. by Vickers, 1984に収められてゐる。
5) ヘルモントの言語思想に関しては，Allison Coudert 'Some Theories of a Natural Language from Renaissance to the Seventeenth Century' に詳しい。この論文は，'Magia Naturalis und die Entstehung der modernen

Naturwissenschaften', 1978 に収められてゐる。

6) 17世紀の普遍言語論，普遍記号論については，パオロ・ロッシ「普遍の鍵」(清瀬卓訳，国書刊行会，原著は1960年刊) 参照。

7) Vickers 前掲書 p. 108.

8) ロックの言語思想のこれらの面に関しては，Hans Aarsleff 'From Locke to Saussure, Essays on the Study of Language and Intellectual History', 1982 の中の 'Leibniz on Locke on Language' に詳しい。

9) ヘンリー・モアに関しては，'The Cambridge Platonists' ed. by C. A. Patrides, 1969 所収の論を参照した。

10) カドワース，シャフツベリーの著作でここに挙げたものはみな，オルムスの復刻版で参照した。

11) シャフツベリーの思想全般については，Willey 前掲書，R. L. Brett 'Fancy and Imagination', 1969, 浜下昌宏「シャフツベリ」(「西洋美学のエッセンス」ぺりかん社，1987，所収) に詳しい。

12) この精神の働きを，ハリスは，多くのものの中に一であるものを，異なれるものの中に類似，同一であるものを一度に見分ける働き，としてゐる。そして，ルクレティウスを引用しつつ，このいはば総合化の能力は，個物から一般観念，命題，推論，学問知識と進んでゆく純粋真理に関はる問題の領域に於て，最も顕著に働くとしてゐる。無論ハリスは，分析能力の存在，意義も認めてゐる。('Hermes' p. 362 n.(f))

13) 表出概念を記号論的に展開させ，特にライプニッツのそれを見事に定式化したものとして，山内志朗「ライプニッツにおける記号論の構図」(「東京大学哲学研究室論集 6」1987，所収) がある。

14) 18世紀ドイツ言語哲学の構図を，やはり表出概念の展開によって，明確に浮き上がらせた労作として，黒崎政男「カントにおける言語と記号の問題」(「哲学雑誌」1987，所収) がある。